

# 日本的家族経営のススメ

## 世界はジャパンスタードを待っている！

株式会社アイパートナー 代表取締役 三村 邦久

### 4) 匠、仕事を極め楽しさを追求する

#### 最高の働き方を追求する

ワークライフバランスという言葉がしばしば叫ばれます。その言葉の前提として、仕事は辛く苦しいもの、私生活は楽しいものという考え方があり、公の仕事と私のプライベートのバランスをとろうということでしょう。

そもそもワーク（仕事）はライフ（人生）の一部であり、その2つはバランスをとるものではなく、ワーク（仕事）を楽しくすれば、人生がより楽しくなるということではないでしょうか。

イメージだけで言葉の意味を深く吟味せずに、横文字を盲目的に崇拝するのは日本人の悪い癖です。確かに、労働時間が長く、就業時間に縛られて、融通がきかない。これでは、窮屈で自由度がなく、豊かさを感じることはないでしょうし、創造性など期待もできないでしょう。

これまでも述べてきたことですが、大きな問題は、利益至上主義で管理のオンパレード。暗黙のルールにまで縛られて、組織に元気がないことです。つまり、長時間労働が悪いのではなく、義務感とやらされ感で、数字と時間に追われ疲れていることが問題ではない

でしょうか。

人生の多くの時間を費やす仕事が辛く苦しいだけのものでは不幸なことです。「苦中楽有り」といわれるように、仕事の中いかに楽しみを見出すかが大事なのではないでしょうか。

#### 「好きで楽しい」が勝つ！

論語にこんな言葉があります。「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」。現代文にすると「よく知る人もそれを好む人には勝てない、好む人もそれを楽しむ人には勝てない」。つまり、知識の多さではなく、好きで楽しいことが最強であるということです。

経営で大事な戦略の要諦は競争優位。競争優位の源泉は人。人の優位性の源泉は、好きで楽しいこと。好きで楽しいことに没頭することは、人間の幸せの大きな要素でもあります。評価がどうか関係なく、やっていること自体が楽しく、目の前のことに完全にのめり込むフロー状態になることが肝なのです。

知的労働の時代に生産性を決める鍵は、時間ではなく思考の質であり、寝食忘れて好きなことに集中し没頭することです。その結

—ここでの家族経営とは、同族で利益を独占する公私混同の経営を指すのではなく、社員を家族のように大事にする人間的経営を言う—

- 1) 金と人、どっちが大事
- 2) 自主と自由、人間の尊厳を守る
- 3) 個性を潰す評価制度
- 4) 匠、仕事を極め楽しさを追求する
- 5) 日本人のグローバル化
- 6) 日本人のメンタリティーを活かす

果、成果を出して評価が上がり、人並み以上に報酬が得られる。好きなことをして稼ぐ、こんな幸せなことはないと思います。

では、好きで楽しいこととは何か。人それぞれでしょうが、理屈抜きに好き、好奇心がくすぐられる。さらに、人より上手にできる能力がある。自信があり優越感が持てて、良い結果が得られる。つまり自分の持ち味が発揮でき、苦勞にも耐えられる土俵で勝負することでしょう。

#### 持ち味を活かしてプロ化する

没頭して専門性と人間性を極め、その道のプロフェッショナルになる。そのためには、自分の持ち味を理解し、戦略思考で志（自己ビジョン）を立てて自らが進むべき方向性を定めることがポイントです。自ら発憤し、将来を見越し必要な知識や能力を身につける。得意な領域を深掘りして、「ドラえもん」のように知恵の引き出しをつくる。そして、素人には見えないところも見通せる鑑識眼を身につける。

さらに、誠実な人間性も武器と考え、周りの人との深い信頼関係を築いていく。そうすることで、自分の価値を自覚し、自信と誇り



三村邦久(みむら くにひさ) 社長参謀

1961年兵庫県生まれ。酒米の王様「山田錦」を育てる父親の愚直な働き方を見て育つ。神戸商科大学(現兵庫県立大学)卒業後、電子部品メーカーに就職。27歳で中小企業診断士資格を取得、経営コンサルタントに転身。中小・中堅企業に対し、業務のIT化、経営管理、評価賃金などの経営システムを構築し、組織運営の円滑化に貢献する。経営の継承、新規事業立上げにも携わり、社長の「夢と悩み」を共有し、会社と人の天性を顕化させることをモットーとしている。著書「愚直経営で勝つ! 経営者9人のチャレンジストーリー」(PHP研究所)

▶座右の銘「収穫を問う莫かれ、但だ耕耘を問え」

が持てるようになります。これは日本が世界に誇る匠(たくみ)の働き方です。

会社にはいろいろな仕事がありますが、どんな仕事でもその道を極めることはできるはずです。営業のプロ、経理のプロ、技術のプロ、教育のプロ、マネジメントのプロなど、会社は多能なプロフェッショナルの集合体です。そして、自分の仕事に誇りを持った人が互いに尊敬し合える組織体であるべきなのです。

どんな仕事であれ、強制されるのと自主性と主体性に基づいてするのは、結果にも雲泥の差が出てきます。能力、やる気と責任に比例して裁量権が増え、創意工夫の余地が広がります。つまり真のプロフェッショナルとは、高い専門性と人間性を持ち、裁量権を与えられた信頼に足る人なのです。

作家の遠藤周作氏はこんなことを言っています。「遠藤さん、どうすればベストセラー作家になれますか?」と尋ねられ、「1日3時間書くのを、10年間やり続けられれば、誰でもベストセラー作家になれますよ」と応えたそうです。

つまり、1日3時間×365日×10年=約1万時間、それだけ努力し続ける忍耐力が必要だということです。その道を極めて閾値(ティッピング・ポイント)に達するには、好きで楽しくなけれ

ば、到底継続することなど不可能でしょう。

そんな人にとって仕事は、やっていること自体が報酬だといえるかもしれません。そして、好きで楽しい仕事に没頭していれば、いつかは成果が出て評価され、誇りが持てるようになります。結果、精神的にも経済的にも豊かな人生を送れるのでしょうか。

### 「愚直」の力を活かす

今の世の中、賢さを追求し、効率・要領を重視したノウハウものが流行(はや)っています。しかし、小賢(こごか)しいテクニックだけでは何ともならないこともあります。いい仕事をするには、長期的視点で本質を突き詰める愚直さが必要です。「愚直」とは愚かなほど真っ直ぐ、正直ばかりで臨機応変な行動がとれないということです。「愚か」とは、鈍い、考えが足りない、損をする、つまりバカであるということ。また「直」とは、筋が通っていて曲がることがない、猪突猛進、空気が読めない、つまりかなり不器用ということです。

一方、「愚か」の反意語は「賢い」であり、物事の判断が適切にできるということです。私たちは子供の頃から、賢さを追い求めてきました。幼い子供が親の言うことを聞くと「賢いね」と褒められ、学校のテストでいい点を取ると

「賢い」と周りから評価をされました。つまり、「賢い」は間違いないこと、寄り道をしないこと、失敗しない確実な方法を選択する。汗をかいてリスクを冒してチャレンジするより、涼しい顔で安定したルールに乗っかる。失敗して批評されるより、批評する立場に回る。そのほうが賢いという価値観が支配的ではないでしょうか。

しかしながら、現実の社会には正解がありません。「人間万事塞翁馬」といわれるように、世の中は何が災いし、何が福となるか予測できません。

こんな時代だからこそ、愚かで真っ直ぐということが大切だと思います。愚直は明確な軸があってブレない、途中で投げたり逃げたりしない、一貫性があって信頼性が高い。手間を惜しまずコツコツとプロセスに手抜きがない、見えないことも大切にする。常識や周囲の意見に惑わされない。そして、成功するまで諦めない。これは、日本人の持ち味を活かした「巧み」な生き方でしょう。

このように考えてみると「賢明」ということと、「愚直」ということの意味づけが180度変わってきます。私たちは本当の「賢」とは何か、「愚」とは何か、そして働くことの幸せとは何なのかを、今一度立ち止まって再考する必要があるのではないのでしょうか。